

— 登山道と宝永の噴火 —

須山口登山道の起源については定かではありませんが、室町時代の京都聖護院門跡であった道興の『廻国雑記』に文明 18 年(1486)頃、道興が「すはま口」を訪れて歌を詠んだことが記されています。この時期に須山には浅間神社をよりどころとした富士山信仰が存在し、登山の拠点としての須山口やそこから富士山頂に至る須山口登山道があったことがわかります。

江戸時代に入り、須山口登山道に大きな打撃を与えたのが宝永 4 年(1707)の大噴火です。登山道・石室も砂に埋もれ、その復興には長い年月と労力が必要となりました。その様子について安永 5 年(1776)の『乍恐以書付奉願上候事』には、「富士山八合目以上をめぐる浅間大社と須走村・上吉田村の争いの際、須山口からの富士登山のことを聞かれ、噴火以後は道がよくなく登山者はないと答えてしまった。このままでは須山口登山道はないとされてしまうので、噴火後も少々は登山者があり、元文 5 年(1740)の山開きの時も多くの登山者がいた、と発言の訂正をお願いした。」ことが記されています。また安永 9 年(1790)の『乍恐以書付奉願上候事』では、「須山口登山道については幕府から改めて認可された。神主 1 人・御師 12 人で導者の世話をしている。道筋については村中で手入れしているが、石室は大破のまままで道筋にも石が抜け出ているところもあり、修理したい。」と願ひ出しています。村民の復興の熱意と苦勞が伝わってきます。寛政元年(1789)には、浅間大社神主富士兵部を通して、富士山九合目と頂上浅間嶽に石室を建設することを寺社奉行所へ願ひ出しています。

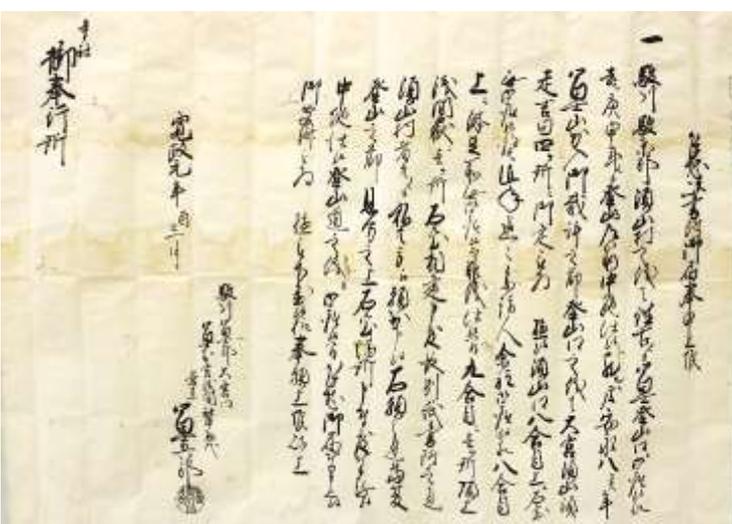
このようにして須山口登山道も再び活気を取り戻し、寛政 12 年(1800)の富士山御縁年には 5398 人(男 5380 人、女 18 人)が須山口より登山しています。登山道について明治初期の絵図に、元禄年間(1688~1704)まで十文字・弁当場を通っていたルートが、宝永の噴火(1707)を契機に安永年間(1772~1781)には御胎内を通り宝永山の東側を通るルートに移っていたことが示されています。



『乍恐以書付奉願上候事』須山口登山道の状況聴取の訂正



『乍恐以書付奉願上候事』登山道と石室の修繕に関する願ひ出



『乍恐以書附届奉申上候』石室の建設願ひ